指導計画案

	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
導入	【小景異情】 1　題名の意図を捉えさせる。 2　犀星とその詩の特質について理解させる。	❶題名に着目させ、「小景」と「異情」について考える。知技 ❷詩によみこまれた思いに留意し、音読する。知技 ❸「作者」の項を読み、室生犀星の詩の特質や詩人について説明する。思判表	❶「小景」つまり、日常のちょっとした情景に対する、「異情」（感覚の違和感）、ということに気づかせればよい。「異情」という普段聞きなれない言葉の持つ意味を理解させたうえで、自分たちが経験した「異情」の例などを想起させてもよい。 ❷生徒各人が、各編章の「異情」に対して、自由にイメージできるようにする。通読の際には、歴史的仮名遣い、文語表記であることにも留意させたい。 ❸「作者」の項を導入のきっかけにして、犀星の生い立ちについて説明を加えたい。そのうえで、この詩編からは詩人のどのような思いが読み取れるのか考えさせる方向に持っていく。
展開	1　詩の構成を理解させる。 2　表記や表現の工夫をつかませる。	❶詩編を二つに分ける。思判表 ❷「異情」と「ふるさと」との結び付きを考え、作者が今どこにいるのかを考える。思判表	❶教科書の指示行数に従えば、5行目までと、それ以降で表現の質が変わるところに着目させる。前半は、詩人にとっての「ふるさと」が描かれ、後半は、それを踏まえての、「ふるさと」を離れる決意が描かれていることに気づかせたい。そのためには3行目「よしや」、5行目「あるまじや」といった、理解しづらい語句については最初に理解させておくことが必要であろう。 ❷繰り返されている、「遠きみやこにかへらばや」に気づけば、今は「ふるさと」にいて、これから故郷を離れ都会に戻る、ということを容易に理解できよう。ただ、その際に、「ふるさと」を愛着しながらも「ふるさと」を離れる矛盾した心情を十分に理解させる。
まとめと発展	1　主題を理解させる。 2　詩人を理解し、詩人にとってふるさとがどのよう	❶どのような感情が描かれていたかを整理し、発表する。思判表	❶自己の感情を見つめて、その繊細さや激しさを短い言葉で的確に表現していく詩人の営為に気づくことができるように、整理させたい。

なものとして描かれているか理解させる。		❷ 表記や音韻による効果的な表現を指摘し、その効果について学ぶ。知技 ❸ 「ふるさと」と「みやこ」に抱く思いを理解する。主態
導入 **【およぐひと】** 1 詩題を理解させる。 2 イメージをつかませる。 3 理解への手がかりをつかませる。	❶ 「およぐひと」からどのようなイメージが喚起されるか注意しながら朗読をする。思判表 ❷ 「およぐひと」の何が描かれているかに注意する。思判表 ❸ 疑問に思った点を出させ、内容への興味を喚起する。思判表	❷ 詩の理解においては、言葉の意味だけでなく、表記や音韻からの理解も必要であることに気づかせる。短く、分かりやすい詩であっても、言葉の表層的な意味の奥には、緻密で、張りつめた言語世界が広がっていることを知らせる。 ❸ 「ふるさと」も「みやこ」も遠くにあって思うことで、思慕する地となるが、現実には双方とも過酷な地であることに理解が及んでいるか、確認させる。
展開 1 詩の構成について理解させる。 2 表記や表現の工夫をつかませる。	❶ 詩の構成を明らかにすること。思判表 ❷ 疑問に出されたことを取り上げる。特に「心臓」に「こころ」、「瞳」に「め」と読み仮名をふっている点に注目する。知技	❶ 朗読により、泳いでいるひとの姿を自己体験と結び付けてイメージさせる。 ❷ 視線が「からだ―二本の手―心臓（こころ）―瞳（め）―たましひ」と移っていることを確認することで構成をつかませる。 ❸ 「心臓」を「こころ」、「瞳」を「め」となぜ読ませているのか、「およぐひとの心臓」がなぜ「すきとほる」のか、「およぐひとの瞳」がなぜ「つりがねのひびき」を聞けるのか等々出てくるとよい。 ❶ 第一行・第二行は見える体の姿態、第三行・第四行は通常の感覚を超えた表現、第五行は見えない「たましひ」が月そのものではない、水面に映った月の影を見るという風に展開していることを押さえさせる。 ❷ 「心臓（こころ）」については、臓器としての心臓と見えない精神を表すこころとを併せて示している。「瞳（め）」については、単純な視覚器官ではなく、通常の感覚を超えたものであることを表そうとしていることを確認させる。

導入	**【永訣の朝】** １　題名の意味を理解させる。 ２　詩の構成を理解させる。 ３　賢治の詩の世界の理解を広げさせる。	
まとめと発展	１　主題を捉えさせる。 ２　詩の世界を広げさせる。 ３「およぐひと」から感じ取ったことをまとめさせる。	

❶ 日常感覚を超えた表現を含みながら、どのような象徴的な表現によって泳ぎの感覚が深く味わえるか話し合う。主態

❷ 萩原朔太郎の他の詩を読み、近代詩の先駆的な詩の世界に触れる。思判表

❸ 鑑賞文を八〇〇字程度で書く。思判表

❶ 詩題「永訣」の語の意味から、この詩が妹の死を歌ったものであることを知る。知技

❷ 範読を通しておおよその場面・意味を理解する。思判表

❸「わたくし」（賢治）、「おまへ」（妹、とし子）であることを理解する。

❹（　）内が方言で書かれた妹の言葉であることを理解する。思判表

❶ 直喩表現の「およぐひとの心臓はくらげのやうにすきとほる」は、水の中に身体を浸したとき、身体が水と同化したような感覚を表現しようとしたものであることを理解させる。

❷「およぐひと」と合わせて読ませたい詩は、参考に出した「ありあけ」「春の実体」などである。

❸「およぐひと」をどのように読み取り、どのような点が興味深かったのかを書かせて、理解の度合いを評価する。

❶ まず、「永訣」という語の意味を伝え、そこに「朝」と続くことで、まさに訣別のときの悲痛な思いを詠んだ詩であるということに気づかせたい。さらに、賢治と妹、トシ（とし子）についての解説を加えることで、より深い理解のための一助としたい。

❷ 範読によって、生徒の多くは、この詩のおおよその場面は理解できるであろう。特に（あめゆじゆ……）の方言のイントネーションに注意させる。

❸ ここで「わたくし」というのが賢治で、「おまへ」が妹、とし子であることはしっかり押さえさせておきたい。また「わたくしのけなげないもうと」「わたくしのやさしいいもうと」という表現から、「わたしたち」が、深い絆で結ばれた兄妹であることもここで理解できるはずである。

❹（　）内の音は、特に音読によって浮かび上がってくると思われる。範読または生徒自身による音読を通して、それが方言であること、さらに（　）が付されていることから、妹の言葉、さらには、賢治自身が想起している妹の言葉であることを気づかせる。

展開		**まとめと発展**
1 場面の展開を把握させる。 2 表記や表現の工夫をつかませる。		1 主題を理解させる。 2 「永訣の朝」から感じたことをまとめさせる。
❶ 場面の移り変わりを理解することで全体の構成を明らかにする。思判表 ❷ 前半の場面の違いを読み取り、妹の言葉によって変化する、「わたくし」の心の動きを理解する。 ❸ 後半の場面の違いを読み取り、祈りの深化をつかむ。思判表		❶ 「みぞれ」「雪」の表現の違いを理解する。知技 ❷ 賢治の他の詩編を読み、その
❶ 時間の推移や、情景描写の場面、心情独白の場面など、場面の違いに気づかせることで全体を六つの場面に分ける。（「構成」の項参照）そのうえで、「……」によって、大きく、前、後半部に分けることができることに気づかせる。 ❷ 前半部は、「みぞれはびちよびちよふつてくる」「けふ」（現在）に、少し前の出来事の回想が挟み込まれていることを押さえさせる。そのうえで、四度繰り返される妹の言葉、「（あめゆじゆとてちてけんじや）」に着目させ、この言葉が初めは、「わたくし」に、妹自身が渇きを癒すための言葉と理解されたこと、しかし、それが「わたくしをいつしやうあかるくするために」発せられたことに気づかせ、さらにはそれが宇宙とつながる結晶として理解されるようになる、その過程をしっかりと把握させたいものである。またそのような妹の思いが、「わたくしもまつすぐにすすんでいくから」という「わたくし」に生きていく決意を促した点も、併せて押さえさせる。 ❸ 後半部は、現在から未来へ向かう意識が描かれる。「おまへ」と「わたくし」の「ふたつのかけた陶椀」に盛られた雪は、「おまへとみんな」、つまり未来の妹と人々の幸福のための「資糧」とされる。そしてそのためには「わたくしのすべてのさいはひ」を犠牲にしてもかまわないと思うことで、「わたくし」は妹の死の悲しみに堪えることができるのである。また「あんなおそろしいみだれたそらから／このつつくしい雪がきたのだ」という表現からは、恐ろしい修羅から清浄な雪が生み出されるのだという感慨も読み取れることにも注意させる。	❶ 詩全般にわたって、「みぞれ」「雪」がそれぞれどのように捉えられているかを、話し合わせて発表させる。特に、「みぞれ」が「ふつてくる」「沈んでくる」という表現が、賢治のどのような認識と結び付いているかを考えさせる。 ❷ トシの臨終を詠んだ他の詩編、「松の針」「無声慟哭」などからも、愛

	導入	
	【汲む】 1 作者の思いをつかむ。	
世界に触れる。思判表 ❸ 場面の移り変わりを理解することで全体の構成を把握する。思判表 ❹ 前半の場面において、妹の言動によって変化する「わたくし」の心の動きを把握する。主態 ❺ 後半の場面を読み取り、祈りの深化を読み取る。主態	展開 1 作品の焦点となる言葉をとらえる。 2 人生の指針となる言葉について考える。 ❶ 私が気付かされたものの内容をまとめる。思判表 ❶「初々しさ」の意味するものについて考える。主態 ❷ 決定的な言葉との出会いということについて話し合う。思判表	❶ 表現指導の観点から、強く心に響いた作品を暗唱して、その感想文を書く。知技 ❷ 詩人とその作品について整理する。知技 ❸ 読書指導の観点から、教科書の詩の出典となる詩集を読み通すことで、詩人の詩の傾向を確かめる。知技
する妹を喪った賢治の悲しみの深さ、そしてそれを表現することへの思いを汲み取ることができる。 ❸ 前半、後半の区分けと、それぞれが三つの場面から成り立っていることへの理解が、詩の読解への重要なポイントになる。 ❹ 前半では、現在の時間系列に、近過去の回想が挿入されているが、その効果も含めて理解できているか、また繰り返される妹の言葉が、「わたくし」にどのような変化をもたらしたか、などを確認させる。 ❺ 後半では、独白、妹の姿の想起、そして祈りへと場面が展開するが、それを把握できているのか問う。また「わたくし」がどのように決意しているのかを確認させる。	❶「私の背のび」の意味を明らかにする。 ❶「大人」になることとの対比で考える。 ❷ 作者の生きる姿勢を明らかにする。	❶ 詩のリズム感や主題に応じた暗唱を心掛け、印象深い点を掘り下げて感想文をまとめる。 ❷ 文学史的な理解を促す。 ❸ 一冊の詩集全体からその詩的世界の雰囲気をつかむ。